逸題（山内容堂）

風は　妖雲を　捲いて　日　斜　ならんと　欲す
多難　意に　関して　家を　思わず
誰か　知らん　此の裏　余裕　有るを
馬を　郊原に　立てて　菜花を　看る

風捲妖雲日斜欲　多難關意不思家
誰知此裏有餘裕　立馬郊原看菜花

解説　外国の艦船が我が辺海を伺うようになってから、俄に国内は騒然としてきているが、英雄の胸中にはおのずから閑日月ありとの意を詠じたもの。

語釈　※逸題＝特に題をつけない詩。※妖雲＝あやしい雲。ここでは外国の艦船が海辺に出没することをいう。※此裏＝このところ。今の事態において。※余裕＝ゆったりとして迫らないこと。※郊原＝野原。

解釈　風は怪しげな雲を巻き、日も暮れようとしている。今、国は前途多難の時であり、家の事など考えてはいられない。このような事は、前々から考えていた事で、そうした中でも心にゆとりがあるのを誰が知るであろうか。私は馬を郊外の野原にとどめ、菜の花を観賞しているのである。